怒る富士

新田次郎

怒る富士

新田次郎全集 21

新潮社版

怒る富士
新田次郎全集第二十一巻
昭和五十一年一月二十日印刷
昭和五十一年一月二十五日発行
定価九八〇円
著者　新田次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162 振替東京四一八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1976, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

怒る富士

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

怒る富士

地鳴り

雪になっては困ると佐太郎は思った。今夜のうちに少なくとも沼津あたりまで行かないと追手につかまる心配があった。

雲の動きは急で、雲の動きにつれて明暗の縞が大地を横切って行った。佐太郎はそっと戸を閉めて外へ出た。寒さが身にしみた。

佐太郎は振り分け荷物を肩にすると、広い庭を忍び足で横切り、門のところまで来て立ち止った。門を開けると門の傍の部屋に寝ている作男を起してしまう心配があった。彼は裏に廻った。屋敷の周囲は築地塀でかこまれ、その外に狭い堀があった。ここらあたりの名主屋敷の多くはこのような構造になっていた。

佐太郎は裏門から外へ出た。堀には氷が張っていた。堀を渡り、凍てついている畑を横切って小道に出た。空は幾分か明るくなった。

ほっとした。真の闇では、いくら馴れた道でも、つるの家まで行くことはできなかった。かがみこんで、空を背景に透かすようにして見るとほぼそのあたりの地形は読めた。急ぎたかったが足もとが不用心で急ぐわけにはゆかなかった。つるとの約束の時刻より遅れたようだった。心配して待っているつるの顔が見える。田圃と田圃の間の道に出た。富士山から吹きおろして来る寒風が刺すように冷たかった。彼は風に追われるような気持でつるの家の前に立った。

「佐太郎さん」

と小さな声でつるが呼んだ。うずくまっていた黒いものが立上った。佐太郎は闇の中でつるの手を取って、おれだよ佐太郎だと言った。つるの手はびっくりするほど冷たかった。ふるえていた。寒いからだと思った。

家を捨てて駈け落ちする罪悪感におののいているのかもしれない。

「用意はいいな」

佐太郎はつるの耳元で言った。つるは黙って彼女の足もとに置いてある風呂敷包みを持ち上げた。佐太郎はつるを抱えこむようにしてその場を去ろうとした。二、三歩歩いたところでつるの足が止った。

佐太郎はぎくっとした。いまとなってつるが駈け落ちは嫌だと言い出したら困るなと思った。名主の倅と水呑百姓

の娘が結婚するには、どこかに駈け落ちして、一時落ちついてから適当な人を間に立てて、親と交渉するしかないのだ。

「どうしたのだつるさん」

「音が、地の底から音が聞える」

佐太郎もその音には気がついていた。遠い山の音だと思っていたが、いまつるに地の底から音が聞えると言われてみると、たしかにその音は地鳴りのようであった。地鳴りはすぐ止んだ。

佐太郎はつるをうながして歩き出した。今度は前よりもはっきりと音が聞えた。地鳴りは大地の唸り声のようであり、うめき声のようでもあった。それは今から駈け落ちしようとする二人に対する呪いの声のようでもあった。

宝永四年十一月二十二日亥の刻（午後十時）。富士山大爆発の前触れの地鳴りの中で、つるは佐太郎にすがりついたまま慄えていた。

「また大地震が起るのではないでしょうか」

つるが言った。先月の十月四日に大地震があったばかりだった。四年前の元禄十六年の今日と同じ十一月二十二日の日にも大地震があった。このときつるの家は倒壊した。つるの村では十五軒の家が倒れ七人の人が死んだ。江戸では大地震の後に大火が起きて五万人が死んだ。八人に一人は死んだのだ。

「どんな天変地異が起ろうがおれとつるさんが夫婦になることに変りはない。さあ行こう」

佐太郎はつるの手を強く引いた。だがつるはためらった。駈け落ちにためらったのではない。地鳴りにこだわったのだ。

（富士山が火を噴く前には必ず地鳴りと地震の前触れがある）

と、古くからこの地方には言い伝えられていた。十月四日の大地震の前後にも地鳴りがあった。ここしばらく地鳴りがないと思っていたが、また地鳴りが始まったのは、村の古老が心配しているように、富士山が火を噴く前触れではないだろうか。富士山麓のネズミが群れをなして山をおりて来るのを見たという話もついこの間聞いたばかりだった。

「なにをおびえているのだ。つるさん、大地震が起きようが、富士山が火を噴こうが、捨てた故郷に未練なんかあるものか」

「捨てた故郷ですって……」

「そうだ、おれたちは駈け落ちするのだ。この村にいては添い遂げられないから他国へ逃げようと決めたのではないか」

なにをいまさらと、佐太郎はつるの耳もとで言って聞か

せた。つるがすすり泣きを始めた。つるは佐太郎が言った捨てた故郷という言葉に打たれて泣いた。二度とこの村へは帰れないのだと思うとむしょうに涙が出て来るのだ。だが、考えて見ると佐太郎のいうとおりだった。他人を間に立てて、親元と交渉しても許されなかったら、二人は一生他国で過さねばならなかった。佐太郎が捨てた故郷と言ったのは嘘ではなかった。捨てた故郷になにが起ろうが関係がなくなるのだ。

「佐太郎さんごめんなさいね、門出に泣いたりして」

二人は歩き出した。地鳴りがした。前よりも大きな地鳴りだったが、つるは足を止めなかった。後を振り返ろうともしなかった。

村のはずれの椎の木の下まで来たとき、大きな地鳴りとともに大地が突き上げられるように揺れた。天と地との境界線が奇妙に揺れ動いた。大地が引き裂かれるような音がした。遠くでなにかが崩れ落ちる音が続いた。大地が激しく揺れ動いているから歩くことはできなかった。二人はしっかりと抱き合ったままで、この世の終りのように揺れ動く暗黒の大地の上に立っていた。立っておられるのは、二人が互いに支え合っているからだった。恐怖のつぎに絶望感が二人の脳裏を交互に通り過ぎていった。

つるは佐太郎の頑丈な身体をたのもしく思っていた。倒れるならば一緒。足もとの大地が裂けてその中に落ちこんでも二人は離れまいと思った。激しい地震が去ってほっと一呼吸つく間もなく、また次の揺れが来た。波のようにおしよせて来る地揺れの中を歩いて行くことはできなかった。

遠くで人の呼び合う声がした。家から外へ逃げ出した人たちの声だった。つるは溜め息をついた。張りつめていた心が地震とともに揺れ動いた。駈け落ちと決った夜になぜ大地震など起ったのだろうか。神もない。仏もない。つるは悲しみの眼を闇に投げた。

闇の中に火がともった。一点の火が丸くふくらんだ。静かな冷たい火の色だと思った。ずっと遠くの火事を夕霧を通して見るような気持だった。その火はかなり高いところに見えた。

「佐太郎さん、あんなところに火が」

佐太郎はつるが指さす方を見た。富士山の中腹あたりに火が見えた。

火だろうかと佐太郎は疑った。その火はどちらかというと赤よりも青い火に見えた。火ならなぜ燃え上らないのだろうか。

佐太郎は慄えながらその火を見ているつるの手をしっかりと握りしめた。青い火が突然赤い火に変り、そして消えた。あとは真暗闇となった。その火が消えた瞬間、佐太郎

は自分自身の奥深いところで燃えている火が吹き消されたような気がした。再び大地が波を打って揺れた。その地震がおさまっても、大地は静かに揺れていた。

「家へ帰らないといけないわ」

つるが言った。親弟妹のことが心配だった。家を捨てたつもりの駈け落ちだったけれど、その家が危急に瀕しているのを見捨てるわけにはいかなかった。佐太郎にはつるの気持がよく分った。こうなったらつるの言うとおり引き返さねばならないだろう。

二人は揺れる大地を援け合いながら走った。佐太郎は、もしつるの家がなんでもなかったら、つるにもう一度駈け落ちをすすめてみるつもりだった。

さっきまで闇の中に立っていたつるの家はそこにはなかった。近所の人が提灯をさげて倒れた家を取り囲んでいた。つるの弟の新吉と妹のよねが放心したような顔で立っていた。つるの母が気が狂ったように騒ぎ立てていた。佐太郎は村の人と力を合わせて、倒れた家の梁の下になっているつるの父親の与兵衛を救い出した。与兵衛は腰のあたりに打撲傷を負っていた。

「つる、どこへ行っていたのだ。おとうさんはお前の身を案じて逃げ出すのが遅れて怪我をしたのだぞ」

母のもんが言った。

つるはただ泣いていた。父親の怪我、家の倒壊、そして、佐太郎との駈け落ちの失敗、すべてを含めて彼女は、この世の中でもっとも不幸な女として泣いた。つるが泣いている間にも余震は続いていた。

一夜に大きな地震が五十数回あった。ほとんど連続的に揺れ続けていた。富士山麓一帯に異変が起きた。山崩れがして、数軒の農家が一度に土砂に埋まったところもあったし、山の斜面が地震とともにけずり取られてしまったところもあった。崩れ落ちた土砂が川をふさいで、そこに池ができた。

多くの家が倒壊した。人々は地震を恐れて屋外に出て一夜を明かした。

夜明け近くなると寒さは一層きびしくなった。夜が白々と明けそめるころになると、余震はいくらか減ったようであった。恐怖の一夜を明かした村人たちは夜が明けるとともにいそがしく走り廻った。それぞれがまず身を守るために狂奔した。

つるの家では、怪我をした与兵衛を近所の家へあずけて、倒れた家の後始末に取りかかった。倒れた家の下から物を持ち出すことから始められた。

佐太郎はつるの家の後始末を手伝っていた。家から迎えが来ても佐太郎は、帰るとは言わなかった。佐太郎とつる

とが駈け落ちする途中で地震に会って引き返したということは、朝日が昇るころには村中の人に知れわたっていた。いつもなら、その駈け落ち話で持ちきるところだが、村人にとってこの日ばかりは、駈け落ちにかまっている余裕はなかった。

佐太郎は三度目に迎えに来た家の者に、

「つるさんとの仲はもう切れなくなった。おやじがうんと言わないかぎりおれは家には帰らない」

と言って手こずらせた。つるの母のもんがそれを気にした。もんは佐太郎にひとまず家へ帰ってくれとたのみこんだ。水呑百姓の身になってみれば名主に盾をついていいことはなかった。田でも取り上げられたら、それこそ生きることはできないのだ。

「つるさんも、おれに帰れと言うのかね」

佐太郎はつるに訊いた。

「どうしようもないでしょう」

つるは涙を浮べて言った。

「ほんとうにどうしようもないのか、どうにもならないのか」

佐太郎はつるの肩を両手でゆすぶりながら怒鳴った。この可愛い眼をした女と別れて家へ帰ったら、もう二度と会えなくなるかもしれない。父の喜左衛門は佐太郎を閉じこめて外へ出さないだろう。

強烈な地震がやって来た。佐太郎は大地がのたうち廻るのを見た。立ってはおられなかった。佐太郎はつると相擁したまま大地に伏した。

大地の底を雷鳴が駈け抜けるような地鳴りがした。

どうやらその地鳴りの源は富士山の方向だった。佐太郎とつるはいつの間にか晴れ上った空の下に静まりかえっている富士山の方に眼をやった。

富士山の中腹あたりに白い柱が立った。富士山の内部からいきなり長大な白い竿を天に向って突き出したように見えた。その白い竿の先に白い大きな手毬のような花が咲いた。

白い竿は、その先に現われた白い手毬状の球体を突き上げながら延びて行った。延びるに従って白い竿は太さをまし、そのいただきにある白い球体もまた膨張して行った。

白い毬は軽く見えた。固体ではなくあきらかに気体であった。白い毬は竿から離れて空中で回転を始めたが、たちまち三つに割れた。球体の形がくずれ、はっきりとそれは煙のかたまりになった。

白い竿は更に高く延び、富士山のいただきをはるかに越えた。竿の先から白い煙の手毬がつぎつぎと空中に舞い上った。白い手毬は、空中にばらまかれると、それぞれが勝

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

手気儘に舞を舞い、ぶっつかり合いながら、その形をくずしていった。

それは、白い巨大な竹筒の先から打ち上げられた、白昼の煙花のようであった。白い手毬が集合して雲の形を整えて来るようになると、白い竿は、次第に黒ずんで行き、やがて黒い柱になった。

人々は黙って山の饗宴に見惚れていた。魅せられたようにどの顔も常の色ではなかった。白い竿と白い毬の曲芸は幻想的であったが、白い竿が黒い竿に変り、竿ではなく、筋張った柱となってからは、人々は恐怖の色を浮べた。

大爆発はそのときに起った。爆裂音はあらゆるものを打ちのめすように強大だった。人々は例外なく鼓膜が破られたと思った。爆裂音と同時に爆風が直立しているものすべてを薙ぎ倒そうとした。佐太郎はつるを掻き抱くようにして大地に身を伏せた。なにが起ったかをたしかめるよりも身を守ることのほうが大事だった。

爆裂音に続いて激しい地震が起った。佐太郎はつるを抱いたまま地上を一回転した。顔が空の方に向いたとき、佐太郎は青空を斜めにかすめていく無数の小物体を見た。間もなく異物が彼等の上に降りそそいだ。

富士山は爆発した。黒い噴煙の柱が富士山の高さを越えた。噴煙にかくれて富士山のいただきは見えなかった。噴煙の柱の中央は太陽をまともに見たときのように、真紅に輝いていた。

南無阿弥陀仏を唱える者がいた。ただわけもなく奇声を発する者もいた。泣いている者もいた。大地をかきむしるようにして叫んでいる者もいた。両手を高く上げて走り出した者もいた。

「世の終りが来たのだ」

と誰かが言った。

佐太郎とつるはその言葉を聞きながら、世の終りが来たのなら、このままここで二人は死ねるのだと思った。二人はいよいよ固く抱き合った。

宝永四年十一月二十三日四ツ（午前十時）富士山は爆発した。いわゆる宝永の大噴火である。

爆発地点と佐太郎、つるの生地駿河国駿東郡深沢村とは四里半しか離れてはいなかった。

噴火は時間の経過とともにその勢いを増した。爆発音は間断なく続き、黒煙の中に火の玉が飛び交い、雷鳴が轟いた。

「佐太郎さん、家へ帰ってくだされ。あなたは名主さんの後継ぎ息子さん。親御さんがどんなに心配しておられることか。帰るなら今だ。親御さんの身を案じて帰って来たと言えば、いままでのことは許されるにちがいない」

もんが言った。
「いままでのことは許されてもつるさんと夫婦になることは許してはくれないだろう」
「それは先のことです。お山が火を噴いているというのに夫婦になるならぬなんて言っているときではないでしょう佐太郎さん」
そう言われてみるとたしかにそうだった。
つるとの駈け落ちの途中で地震が来たとき、二人の間の約束ごとはすべて日延べになったのだ。佐太郎はつるに言った。
「ひとまず家へ帰る。しかしおれとつるさんは死ぬも生きるも一緒だぞ」
つるは大きく頷きながら悲しくあきらめた。
昨夜から今朝にかけての激しい移りかわりの中に動顚もせずどうやら来られたのは傍に佐太郎がいたからだった。その佐太郎がここを去ってしまったとき、なにもかも終りになってしまうのではないだろうか。
「これをかぶって行きなさい」
つるはつぶれた家の下から取り出したざるを佐太郎に渡した。降って来る小石や砂を防ぐにはなにかかぶらなければならなかった。
佐太郎はつるの好意のざるをかぶって村の道を走った。荷車に家財道具や食糧を積みこんでいる家があった。一軒や二軒ではなく軒並みに引っ越しの準備をしていた。佐太郎が通りかかっても見向きもしなかった。
深沢村名主喜左衛門は帰って来た佐太郎を見て怒気を顔に表わして言った。
「どの面下げて帰って来たのか」
「この面下げてさ」
そして佐太郎は母の安否を聞いた。母のけさは佐太郎の声を聞いて出て来て言った。
「水呑百姓の娘なんかと駈け落ちしたからお山が怒ったのだよ。お前には、深良村の名主仙右衛門さんの娘のまつさんをお嫁さんに貰うことに決っているのだよ」
母のけさは佐太郎の嫁のことをまず口にした。母にとっては、大地震よりも、噴火よりも息子の縁談の方が重大なことなのだ。佐太郎はその母が哀れであった。これが名主の妻なのであろう。
「もうそのくらいにして出発しろ、行く先は深良村の仙右衛門さんのところだぞ」
喜左衛門が、牛車に荷を積みこんでいる下男たちに言った。佐太郎は空を見上げた。噴煙は東へ東へと流れていた。南の深良村の方にはまだ青空があった。
噴煙が空を覆うと夜のように暗くなった。爆発と鳴動が

続き、火柱が天を突き、火の玉が上空を走り、噴煙の中に雷鳴が轟き、電光が間断なくきらめいていた。

焼け砂が豪雨のような音を立てて降った。景観は見る見るうちに変っていった。

深沢村名主喜左衛門はまず自分の家の主なる家財と食糧を深良村へ疎開するように指示してから、村中を廻って、深良方面へ逃げるように命じた。

「大事なものだけ持って逃げろ、まず生命を守ることが大事だぞ」

喜左衛門は五人組頭にもその旨を伝えた。深沢村から深良村までは三里あった。道は平坦な道であるから逃げるとすればこの方面しかなかった。喜左衛門は噴煙が東へ東へと流れて行くのを見て、このように処置したのである。

少数の人が後に残って多くの人は家を捨てた。持てるだけの物を持ち、牛馬を牽いて南へ南へと移動して行った。深良村までは行かずに、一里半ばかり南へ行くと、砂降りはさほど激しくはないから、沼田あたりの知人の家に老人、子供荷物をあずけて、空車を引いて残りの荷物を取りに引き返す者もいた。

夜になると、富士山は赤く燃えて見えた。噴火はいよいよ激しくなり、焼け石の飛礫が降って、家を焼いた。噴火の火と電光に呼応するように、あちこちの村から火の手が上った。

北の方の須走村あたりから上った火の手は翌朝になっても消えなかった。自分の家が焼かれるのを心配して、火の雨が降る中を村に引き返した者が多かった。

佐太郎は喜左衛門の家に雇われている三人の男と深沢村に踏み止まって焼け石の飛礫と戦った。茅葺き屋根だから、焼け石が落ちて燃え出したら消しようがなかった。彼等は屋根に登って、焼け石が落ちると叩き落す作業をしていた。

「気をつけろ、火が消えているように見えても焼け砂と焼け石だからな」

佐太郎は、同じ降るなら、焼け石より焼け砂にしてほしかった。

砂は屋根に落ちるまでに火が消えていた。だがかなり温度が高く、いつ発火するか分らないような状態だった。

夜半になって下男の一人が屋根からころがり落ちた。灰で咽喉をやられはげしくせき込んでいるうちに足を滑らせたのであった。佐太郎は全員を屋根からおろした。これ以上ここに止まることは危険だった。水を飲みに行ったが川の水は焼け砂が浮いていて飲めなかった。

佐太郎はつるのことが心配だった。彼は屋敷の防備を放棄した足でつるの家へ走ったが、そこには人影はなかった。佐太郎は男たちを引き連れて深良村へ逃げた。夜が明けか

かっていた。佐太郎は疲れ果てた身体を仙右衛門の家に横たえた。佐太郎と婚約関係にあるまつが心配そうな顔で彼の傍に坐っていた。佐太郎は眼をつぶった。つるはどこへ逃げたのだろうか、怪我をした父親を連れて彼女はこれからどうするのだろうか。

爆発二日目を迎えて噴火は本格化したかに見えた。噴煙も高く上り、焼け砂も遠くまで飛んだ。爆発が激しくなったので、近村には杏大の焼け石が降った。もし、噴火と同時に、このような大きな焼け石が広範囲に降ったら山麓の村々は一軒も残らず焼失したであろう。こまかな砂のような灰が降り積った上に、比較的大きな焼け石が降って来たので、前に降った砂は防火の役をした。不幸中の幸いであった。もっとも須走村のように第一日目に全村が焼けてしまったところもあった。

二日目の朝までには富士山の東部約七十カ村の村民たちはほぼ安全地帯まで逃げ延びていた。人々は声もなく、怒る富士を悲しげな眼で眺めていた。

この富士山の爆発当時の模様については幾つかの確かな記録が残っている。富士本宮浅間神社内乗徳院の社僧飽休菴が書いた「大地震富士山焼出之事」の中の一部分を現代文に要約して次に掲げる。

十一月二十三日の午前十時ころであった。富士山の南東方向の八合目あたりから、真白な蹴鞠のようなものが飛び出して空中をくるくると舞った。その白い蹴鞠は次第に大きくなり、数も増して、やがて雲となり、富士山の南東の空を覆った。富士山に異変が起ると同時に震動鳴動が続いたので、富士山麓の住民たちは、富士山が崩れ落ちて来るにちがいないと言っておびえた。家を捨てて逃げ出す者もいた。しかし午後二時ころになると上空の西風が強くなったので、噴煙は東へ東へと流れて行って、こちらへ砂が降る心配はなくなった。夜になると凄まじい光景が見られた。富士山は大火となり、十丈（約三十メートル）ほどの火の玉〝火山弾〟が上空高く打ち上げられ、近くの山に落ちて、火の子となって飛散るありさまはただおそろしいばかりであった。一丈（約三メートル）ほどの太刀の形をした電光がたがいに切りむすぶように見えた。雷鳴は耳を聾するばかりであった。戸障子は一晩中鳴り続けていた。富士山が一晩中噴火しているので、富士宮の付近は夜になっても行灯を必要としなかった。

富士本宮（現在の富士宮市）の方向には、焼け石も焼け砂

も降らなかったから、恐怖にさらされながらも、すばらしい夜景を見ることができたのである、このとき駿東郡方面は昼でも行灯をつけねばならないほど暗かったというのに、富士本宮方面では夜は行灯が要らないほど明るかったという対照的な事実はまことに興味深いものがあった。爆発地点から富士本宮までの距離は僅かに四里であった。爆発地点が富士山の東面であったから、山体が防壁となったことと、上空の偏西風が噴出物の多くを東側に吹き飛ばしたのであった。

富士山頂を中心として南西方向にあたる富士本宮の状況はこのようであったが、富士山の北面にあたる富士吉田方面はこの大爆発をどう見たのであろうか。

富士吉田の御師（富士講の先達）田辺安豊はこの時の様子を長歌にした。その一部を要約する。

二十三日の朝には数え切れないほどの地震があった。午前十一時ごろに、富士山の南の空高く巨大な吊り鐘のような形をした光り物が現われたと見る間に上空は黒い煙に覆われ、富士山は鳴動し、雷鳴がとどろき電光がきらめいた。こんな状態がずっと続き、夕刻よりは噴火はいよいよ勢いを増し、午後八時ごろには、火の玉〝火山弾〟が空へ向ってさかんに打ち上げられた。恐ろしくて夜も寝られなかった。二十四日になると噴煙はいよいよ多くなった。富士山の東口登山道に当る須走村に焼け石が降って一村ことごとく焼けてしまったと聞いて、吉田では大騒ぎになった。女子供は避難を始めた。二十五日は朝は天気がよかったが昼ころから曇った。御師、神主などは全員、吉田の浅間神社に集まって、山の怒りが静まるように祈願したところ、午後から西風が強くなったので噴煙はことごとく東へ流れ去った。

富士山そのものは浅間神社の御神体であり、木花咲耶姫が祭られていた。人々は女神の怒りを静めるためただひたすら祈るしかなかった。

噴煙は上空の西風に乗って東へ東へと流れた。富士山の東山麓駿河国駿東郡五十九カ村、相模国足柄上郡と足柄下郡がもっとも甚大な砂降りの被害に会った。富士山から遠くなるに従って降砂も少なくなり、箱根を越え、小田原を過ぎ、相模平野にかかると降砂の量は一段と減じた。「富士山自焼記」によると、

大磯より戸塚まで六里のうちは、小砂利ほどの石三、四寸ほど降り積り申候。

とある。戸塚から江戸にかけては降砂は更に少なくなっていた。「翁草」による江戸の様子を要約すると、

宝永四年十一月二十三日午刻時分（正午頃）震動、雷鳴が激しく起った。西より南へかけての空には墨を塗ったような黒雲がたなびき、闇夜のようになった。八ツ時（午後二時）になると鼠色の灰が降り、晩景から夜にかけていよいよ激しく降りしきり、大夕立が来たようだった。どの家も灯りをともした。往来も絶えた。たまたま通行の人がこの砂に触れて目くるめき、怪我などした。砂降ること七、八寸、所によりては一尺あまりもあったそうだ。翌月から春にかけて江戸の人は一人残らず感冒にかかり、咳嗽に悩まされた。

かなりくわしく書いてあるが降灰の量だけはおかしい。このとき江戸に降った降灰は約三分（一センチ）だったと言われている。

新井白石の「折たく柴の記」には、この日は降灰のために急に暗くなったので燭をかかげて講義をしたと書いてある。江戸市民にとっては思いもかけない一大異変であったに違いない。

江戸の降灰

大老柳沢吉保（松平美濃守吉保）は駒込の下屋敷（六義園）に将軍綱吉を迎えた。

およそ二万坪の庭の中に築山、泉水があり、懸崖から流れ落ちる滝の下には金銀宝玉の類が敷きつめられていた。邸内には将軍のための御成り御殿が設けられ、奥の間には、銀の大鉢に紅玉の砂を盛り、金で作った菊の花が植えられていた。

晩年の将軍綱吉は特にきらびやかなものを好んだ。金の菊は綱吉の奉仕に徹しようとしている吉保が考え出したもてなしの一つであった。

「ほう、おそ咲きの菊か見事なものだ」

綱吉はそれを讃めた。その日は旧暦の十一月二十三日だから今の暦に直すと十二月十六日である。既に菊が見られる季節ではなかったから、おそ咲きの菊と言ったのである。

「そうだ、今日はこのおそ咲きの菊を歌にしてみようぞ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo